

魔女のミルクグレーテ

むかし、あるところに、ミルクグレーテという年とつた魔女がいました。

ミルクグレーテは、牝牛を一頭しか持っていないのに、五十頭分ものミルクをとることができました。

それをふしぎに思った近所の牛飼が、ある日のこと、ミルクグレーテの牛小屋にこっそりしりしりひこんで隠れていました。すると、そこへミルクグレーテが、大きなミルク桶を背負って入ってきました。桶の中には、ミルクがほんの少し入れてありました。ミルクグレーテは桶をおろすと、手でまじないをしてこうつぶやきました。

魔女の宝よ 牧人の貢よ

どの牝牛からも二さじ分だよ

すると、桶はとびきり上等のミルクでいっぱいになりました。ミルクグレーテはその桶を背負って、牛小屋から出て行きました。牛飼はその呪文をすっかり覚えると、大喜びで家に走って帰りました。そして、自分も牛小屋で試してみることにしました。ただ、二さじでは満足できないで、こうつぶやきました。

魔女の宝よ牧人の貢よ

どの牝牛からも二桶分だよ

すると、桶はミルクでいっぱいになりましたが、やがてミルクは桶からどんどん流れだしました。まもなく、牛小屋も家もにつきり、とうとう牛飼までもミルクにつかって、おぼれて死んでしまいました。

ミルクグレーテは、屋根裏の棟木に座って、くすくす笑いながらいました。

「これで、あいつもわしのまねはできっこないわい」

村上郁再話

『グラフィックカラー世界の民話2 フランス・ベルギー・スイス』研秀出版